

帰って来た



すみ子さん

## 帰ってきたすみ子さん

---

師走に入ると、夕方六時でも真っ暗だ。帰りのバスの窓から、直美は、ぼんやり住宅地のいつもの景色を眺めていた。

「楽しかったあ。こんな時間になってしまって。でも、もう文句言う人いないもんね」

直美は、小さく笑った。友人四人と、お互いの古希のお祝いをした。その余韻に浸ったまま、ほとんど乗客のいなくなったバスを降りる。

「えっ！何！まさか」

道路を渡ろうとして凍り付いた。三年前に亡くなった姑のすみ子が、反対側のバス停にいたのだ。

「いやだなあ、私。老眼ひどくなって」

苦笑いして、目をこすりながら行き過ぎようとした。

「直美さん」

か細い声が聞こえた。

「えっ、お義母さん！」

薄い靄がかかっているが、確かにすみ子だ。足は？ない！

心臓が破裂しそうになった直美は、案内板のポールに寄り掛かった。そして、胸を押さえて、浅い呼吸を繰り返した。

「直美さん、帰ってきたの、私。よろしくね」

「えっ、いや、そのあの。三日前の命日、お墓参りに行きました。よ、ね」

「そう？全然知らなかった。あのねえ、面白くないのよ。あっち。まわり、いやな人ばかり。しばらくお願いね」

「あわっわわ」

走り出したが、胸が苦しくて足がもつれた。

「た、ただいま！」

震える手でドアをしっかりと閉め、鍵もかけた。でも、いた！直美の周りをユラユラ漂っている。

「ふー！」

玄関で、猫のソラが、毛をそばだてしっぽを立てて、うなっている。

「きゃあ、直美さん！猫よ！猫!!私がこんなに猫きらいなのに」

直美は、ソラを抱き上げながら、自分もこんな風にうなりたいたいと思った。

「おー、お帰り。楽しかったか」

夫の和夫がキッチンから笑顔を向けた。しかし、直美のただならぬ様子を見ると

「えらい顔してどないしたんや」

心配そうに直美の顔を覗き込んだ。

「ほ、ほら、お義母さんが！」

息も絶え絶えに言う直美に、笑って言った。

「何言うてるんや。おふくろが、何？」

「何って、ここに」

「あほなこと言うたらんと。風呂沸かしといたぞ。疲れたんや、はよ休み。夕飯はいらんて聞いてたから。俺はカップ麺食べるな」

「キャアー」

突然、直美の鼓膜をつんざくような悲鳴がした。

「カ、カ、カップ麺！直美さん、あなた、一家の大黒柱の夕食にカップ麺なんて。うああ、和夫、なんて不憫な」

「いえ、和夫さん、結構おいしいって」

そう言ってすみ子を見ると、体が揺れている。

(えっ、幽霊も震えるの？いや、怒っているのだ。そうだった、いつも何かに腹を立てている人だった)

和夫はのんびりお湯を沸かしている。

「ビールのつまみに刺身買うよう言われてたけど、邪魔くさなってな。あはは」

すみ子は直美にしか見えないのか。どうすればいいのかと考えると、熱が出てきた。

「ほら、ソラもごはんやぞ」

和夫とソラを残して、直美はよろよろと二階へ上がった。すみ子、いえ、すみ子の幽霊もふわりと付いてくる。

「お義母さん、お布団ありませんし、食事も作れませんし」

度胸を決めた直美は、すみ子に向かい合った。

「あらご心配なく。お布団もお食事もないのよ。今の私」

「あちらで心配されてると思いますし、早くお帰りになった方が」

「大丈夫よ。きちんと許可頂いてこちらへ来てますの。相変わらず心配性ねえ、直美さん」

「それじゃまあご自由に。私もう倒れそうです。お風呂入って休みますね」

洗面所で、すみ子は直美をじつとりと見た。

「直美さん、老けたわねえ。それに、無理なダイエットしてるでしょ。ガリガリじゃありませんか」

「お義母さんはお変わりなく」

幽霊といえどもあんまりだ。何も考えられなくなった直美は、そそくさと湯船に体を沈めた。

すみ子とは、四十年以上の同居。そして長い介護の末、なんとか看取った。できることはやり切ったと思う。

葬儀の後、見上げた初冬の空が美しかった。自分を縛っていた枷が粉々に砕けていった。その時、心に誓ったのだ。

「さあ、私の自由を謳歌しよう」

だから、ずっと飼いたかった猫を保護猫センターで、もらい受けた。あの澄んだ空を想い『ソラ』と名付けた。

お風呂を出ると、すみ子の姿はなかった。

「どうか白昼夢でありますように」

そう念じて布団にもぐりこんだ。

次の朝、重い体を引きずるように起きてくると、いた。やはり。もうため息をつくこともできず、黙ってりんごとヨーグルトだけの朝食を作る。その間に和夫は、風呂掃除だ。

「うんまあ！あの子に風呂掃除をさせるなんて！なんて不憫な」

直美はもう相手にならず、トーストをもそもそかじった。ソラがやってきて、欲しそうに見上げる。

「ソラちゃんはこっち。おあがり」

キャットフードをお皿に入れてやる。猫が傍にいとすみ子は寄ってこない。

「顔色悪いなあ。病院行くか？燃えるごみ出したら車出すぞ」

「ありがとう。大丈夫よ。あまりよく眠れなかつただけやから。コーヒー飲んだらすっきりしたわ」

ごみ袋を持って玄関を出た和夫の背中を見つめたすみ子は、目をつり上げた。

「うんまあ！直美さん！以前はつきり言いましたよね。『ごみ捨てるような恥さらしのことだけはさせないで』って。なんて不憫な」

直美は黙って食器を食洗器に入れた。

「うんまあ！なんて贅沢な！洗い物くらい主婦がしなくてどうするんですか！」

直美は血圧を測って、いつもの大量の薬を取り出した。帰ってきた和夫が、クリーナーをかけ始めた。

「うんまあ！直美さん、あなた一体、何やってるの！私はあの子にほうき一本持たせたことないのに。なんて不憫な」

直美は喉まで出かかった言葉を、薬の水と一緒にぐっと飲みこんだ。

（そうだった。人の話を全く聞かない人だった。自分だけが正しいと信じていたあの自信はどこからきてたのか未だに謎だ。若い頃は衝突したこともあったけれど、絶対口答えしないと決めて暮らした。ほんと、四十年、長かったよなあ）

すみ子に話しかけると、和夫がまた熱が出てると大騒ぎするので、だまってやりすごす。

洗濯機が「終わったよ」の合図を鳴らす。直美がハンガーに掛けたものを、手際よく和夫が庭に出す。

「うんまあ、直美さん！ご近所に恥ずかしいじゃありませんか。ほんとにほんとに、なんて不憫な」

直美も、最近和夫に甘えすぎていると思う。できることはもっとやっていこう。そう思ってフローリングの床を拭きだした。

「あら、直美さん、できるじゃありませんか。ほらその隅、ほこりがたまってますよ。カーテンも汚れてるわねえ。年末が来るのに」

和夫が怒って言う。

「何やってるんや、気になることは言うてくれ。俺がやるから」

「大丈夫よ。あんまりのんびりしすぎてたわ。気を付けるから。ね」

直美は、そう力なく笑った。

和夫があまり心配するので、留守の時に片づけをした。シンクを磨く。

「あら直美さん、もっと力入れないと。ほら水道の裏真っ黒よ。換気扇もひどいことになってるわねえ」

すみ子がふわふわ漂いながら機嫌のよい声を出す。押し入れの片づけをする。

「あらあ、直美さん、収納ボックスの上ほこりだらけよ。ほら、しっかり持ち上げて。あなた七十才なんてまだ若いよ。私なんてそりゃあ」

確かにすみ子は、九十才で突然倒れるまでよく動き回り、床も滑りそうなほどつるつるにし、家じゅうどこも磨き立てていた。流石にその後の五年は、寝たきりだったけれど。

「直美さん、今日のセーター派手すぎるんじゃない？」

相変わらずの服装チェックだ。直美はできるだけ地味な服装でずっと過ごして来た。アクセサリも持っていない。そういうものは家事の邪魔だと言われてきたのだ。

すみ子の幽霊との奇妙な暮らしが一週間続き、直美は、また倒れた。

救急車の中、

(今度はだめかなあ)

薄れていく意識の中でそう思った。

もともと丈夫ではなかったけれど、ここ何年も体調が悪かった。胸の痛みは、ずっと気にはなっていたけれど、介護に追われ自分のことどころではなかったのだ。

(一度でいいからのんびり昼寝がしたい)

それが直美のささやかな願いだった。すみ子が逝き、やっとそれがかなう日々を送れるようになった。そんな矢先、胸に激痛がはしり、意識を失ったまま、救急車で運ばれた。大きな心臓手術をして、ながい入院となってしまった。

突然のことで慌てたけれど、夫の和夫が奮闘した。全くできなかった家事を。離れて暮らす息子や娘に迷惑をかけたくない。そう思ってしゃにむにやったのだ。

直美は、退院しても家事も思うようにできず、寝たり起きたりの暮らしが、続いていた。何度も高熱を出し、そのたびに短期の入院を繰り返した。和夫の支えで、日が経つにつれて少しずつ健康を取り戻していった。あの十二月の遅くなった日は、四年ぶりの若い頃の友人たちとの会食だったのだ。

すみ子は病院が嫌いだったから、病室には現れなかった。

(家で漂っているのだろうか。せつかくつかんだのんびりした暮らしは、もうもどらないのだろうか)

直美は、そんなことばかり考えて、入院生活をやりすごした。そして、なんとか一命を取り留めて退院してきた。それから、ちよつとでも何かしようとする、和夫が飛んでくる。また、寝たり起きたりの毎日だ。すみ子が漂っているのにも慣れた。

そのすみ子に、静かにきいてみた。

「今更ですけど、お義母さん、どうしてこっちへ？」

「言い忘れたことがあって、特別に許可もらったの」

「あら、何かしら」

すみ子は、ベッドの直美をちょっと困ったように見た。

「その前に、直美さん、体大変だったのね。全く知らなかった。大切にしてね。和夫がその猫相手に泣いてましたよ。だから、直美さん、家事のことはもう気にしないで、長生きしてやってね。和夫が不憫だから」

それから、はあっと大きく息を吐くと、

「いえね、考えたら直美さんにはお世話になりっぱなしで。きちんとお礼言っていなかったから。少しきついこともあったかもしれないでしょ」

(少しではなかったような……)

直美は心でつぶやいた。

「本当にありがとうございます」

そう言われると、直美も心がじゅわっと溶けていく気がした。

ごめんなさいとありがとうが、どうしても言えない人が言ったんだ。そう思ってクスッと笑った。

すみ子は続ける。

「言い忘れたことを言うまではこっちにいられるの。だからできるだけ言わないでいようと思ってたんだけど、でも、もう向こうに戻ります」

「なんででしょう？」

「直美さんにカメオのブローチもらってほしいと思って。うふふ、見せたこともなかったでしょ。そっと、秘密のところに隠していたのよ。それを伝えたくって」

「ブローチ？あっ、手芸箱の糸玉の中にあったブローチですか？」

「えっ、見つけてたの？よかったあ。直美さんにあげると言えなくて。ほら、突然倒れたでしょ。大切にしてね。それだけを言いたかったの」

「どうもありがとうございます」

「あれはね、年代物のイタリア製で、ものすごく高価なものよ。嫁いで来たとき夫からもらったの。何度も売ろうと思ったけれど、じっと持ってたの」

「あれ、ソラがじゃれていて見つけたんですよ」

「直美さんが気づいてくれてよかった。じゃあ、戻るわね。もうこれで、二度と。さようなら」

すみ子の姿がだんだん薄くなっていった。その背中に直美は言った。

「あのブローチ、おもちゃだと思って、バザーに寄付しましたよ」

「うんん？」

すみ子が薄くなっていく。

「きれいだから、千円で売れたとか」

「ええー！まああああああー」

声が遠のき、すみ子の姿がすっかり消えた。